

随筆・提言

やんばるを歩く楽しみ

共同通信社・那覇支局長

藤塚正道

沖縄本島北部の「やんばる」と呼ばれる一帯は自然の宝庫だ。最高峰でも標高五百三メートルの与那覇岳。本部半島は別として、東西の幅は十キロ前後にすぎない。にもかかわらず、森林、草花、動物、昆虫と豊かな生態系を抱えてわれわれを楽しませてくれる。

そんなやんばるに魅せられて、月に一、二回通うようになったのは、那覇に着任してから間もない二年前だった。もともと山歩きが好きで、関東では丹沢や奥多摩に遊ぶことが多かったが、こちらであらためて目を開かれた思いがする。

初めは友人たちと森林に分け入り、無人の浜でゆったりとした時を過ごした。ベテランガイドが案内する川上りツアーも経験した。ここ一年余りは山歩き同好グループの一員としての活動が主体になってきた。

つい先日は、東海岸北部の安田川を歩く機会があった。同好グループの仲間とともに、海岸にほど近い橋のたもとから流れに入り、さかのぼること約六時間。

水辺にはカニやタナガールがはい回り、岩陰にヒメハブがたたずむ。水面すれすれにクロアゲハやリュウキュウハグロトンボが舞う。ときに

「ひゅるるるる」とアカシヨウビン独特の鳴き声も聞こえる。川の両岸は日陰へゴや蔦の密林が続く、よく見ると枝には緑鮮やかなカエルがへばりついていた。

そこで、考え付くのが「楽しむ自然」と「守る自然」の調和だ。

シーズン中、人々が数珠つなぎになる尾瀬湿原の木道に象徴されるように、本土では大量の訪問者から自然を守るために登山道が整備さ



れているところが多く、ハイカーは定められたルートから外れないことを期待されている。しかし、まだまだ立ち入る人が

少ないやんばる

では、登山道をつくること自体が自然破壊につながりかねないのではないかと思われるケースも見受けられる。例えば、塩

屋富士の散策ルート。確かに歩きやすいが、ここまで整備する必要があるのかとも思う。踏み跡をたどれば十分ということもあるだろう。

自然保護を徹底すれば、森や

川の中に足を踏

み入れず、遠くから眺めるだけにするとということになる。しかし、大切なのはほどよい距離感ではな

いだろっか。川の歩行もそうだが、藪こぎも自然に一定の負担をかけている。

ハイカーが大勢で同じ場所を踏み付けられ、確かに草木は痛めつけられる。それは避けなければならぬ。山歩きの仲間たちは参加者が多い場合、自然に対する影響を軽減するためにグループを分けるなどの工夫をしている。

今回の川歩きでも感じたことだが、台風による倒木やがけ崩れなどをいかに修復するか、役所に任せておくだけでいいのかとも思う。

かつて米国でハイキングクラブに所属していたが、印象に残っていることがある。ボランティアによる登山道の整備だ。長大なアラチアン山地の登山道を分割、一定区間について地域ごとの山岳会が責任を負う。それぞれの会員が一キロほどを分担して、倒木の片付けなどをしていくと記憶する。

自分自身、やんばるとの付き合い方を考えさせられることが多いハイカーのひとりだ。沖縄総合事務局には、林道や砂防ダムなどの開発について、県民や観光客が貴重な自然を末永く楽しめるように、ローインパクトなやり方を追求してほしいと願ってやまない。

* * *